

埼玉県本庄市

旭・小島古墳群発掘調査報告書 II

—株式会社山本製作所本庄工場内に所在する埋蔵文化財調査報告—

平成元年3月

本庄市教育委員会

埼玉県本庄市

旭・小島古墳群発掘調査報告書 II

—株式会社山本製作所本庄工場内に所在する埋蔵文化財調査報告—

平成元年3月

本庄市教育委員会



序 文

本庄市は埋蔵文化財の宝庫として現在 174 ヶ所の遺跡を数えることができます。

かつて、中山道本庄宿として栄えた本庄市は、歴史的にも古い土地ですが、最近では道路網の整備、市街地の拡大、工場の誘致と発展の一途をたどっております。このような中で、埋蔵文化財の保護対策も重要な命題の一つとなっております。私ども教育委員会では鋭意努力しております。

今回の発掘調査も開発に伴うものでありますが、埋蔵文化財保護に対する御理解並びに、御協力をいただいた株式会社山本製作所に対し、厚く御礼申し上げます。また、調査に際して御指導をいただいた埼玉県教育委員会及び、関係各位の方々、調査を担当した社会教育課職員並びに、地元のみなさま方に感謝いたします。

最後に今後とも開発と文化遺産の調和のとれた保護を課題として、明日の本庄市へ伝えることを願ってやみません。

平成元年3月20日

本 庄 市 教 育 委 員 会

教 育 長 坂 本 敬 信

例 言

1. 本書は本庄市大字下野堂字七本木境、屋敷内に所在する旭・小島古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社山本製作所の本庄工場建設に先立つ事前の記録保存のために実施した。
3. 調査の実施は埼玉県教育局指導部文化財保護課の指導により、本庄市教育委員会が実施し、上里町側については上里町教育委員会と協議し、実施に際しては指導、助言を得て行なった。
4. 調査経費は原因者負担により株式会社山本製作所が負担した。
5. 発掘調査及び、整理作業は本庄市教育委員会社会教育課職員である増田一裕が担当した。
6. 本書の編集及び、執筆は増田が行なった。
7. 調査期間中あるいは、報告書作成に際しては次の諸機関、諸氏より御指導、御助言を得た。記して感謝いたします。

埼玉県教育局指導部文化財保護課、上里町教育委員会、

宮崎朝男 水島治平 外尾常人 田村 誠 丸山 修 岡本幸男
長瀬 歳康 佐藤好司 小野英彦

8. 発掘調査にかかる作業員の雇用については、万年寺自治会長河田 桂、下野堂自治会長塩原喜一、小島自治会長今井亮一各氏の手をわずらわした。また、下記の作業員の方々の協力を得た。記して感謝の意を表します。

(故)茂木秀敏 (故)門倉正治 笠本源一 荒井幸太郎 木村金作 木村喜平
八木道良 堀田依包 折茂武年 久保田小四郎 笠本作治 町田惣吉
戸谷安雄 山口常松 塩原正規 村上和光 牛込哲人 高橋佐登司
亀田吉之助 倉林和男 入沢九藏 中田和夫 大野洋子

目 次

序 文

例 言

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の組織	2
第3節 調査日誌抄	2
第2章 地理歴史的環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 遺構と遺物	7
第1節 調査の方法	7
第2節 遺構と遺物	8
第1号墳	8
第2号墳	14
第3号墳	19
第4号墳	23
第5号墳	27
第4章 考 察	30
第1節 遺構と遺物	30
第2節 旭・小島古墳群の消長と性格	34
あ と が き	43
写 真 図 版	

挿 図 目 次

第1図	発掘調査位置図	7
第2図	層位柱状図	8
第3図	調査地区内遺構配置図	9
第4図	第1号墳平面・断面実測図	10
第5図	第1号墳石室実測図	11
第6図	第1号墳出土遺物実測図	12
第7図	第2号墳平面・断面実測図	15・16
第8図	第2号墳出土遺物実測図	17
第9図	第3号墳平面・断面実測図	20
第10図	第3号墳石室実測図	21
第11図	第3号墳出土遺物実測図	22
第12図	第4号墳平面・断面実測図	24
第13図	第4号墳石室実測図	25
第14図	第4号墳出土遺物実測図	26
第15図	第5号墳出土石室材実測図	27
第16図	第5号墳平面・断面実測図	28
第17図	第5号墳出土遺物実測図	29
第18図	第1～5号墳の配置企画図	30
第19図	各石室のプラン復原図	31
第20図	玄室内の遺体配置状態	32
第21図	土師器坏の分類	33
第22図	北武蔵系土師器坏の鈴木編年試案	33
第23図	旭・小島古墳群分布図	34
第24図	三壺山古墳と三壺山7号墳測量図	35
第25図	八幡山古墳周辺測量図	36
第26図	旭・小島古墳群各地出土の埴輪等集成図	37
第27図	三田支群における古墳及び古墳址と推定される分布図	39
写真1	重機による発掘調査風景	3
写真2	三田支群航空写真	39
第1表	旭・小島古墳群三田支群一覧表	40

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本市は埼玉県の北西部に所在する中核都市で、人口約55,000名を数える。戦前より養蚕と農業に依存する産業体系からなってきたが、近年では工場誘致、市街地域の拡大とそれに伴う商業圏の移動あるいは、道路網の整備と近代化が進行し、また、児玉工業団地をはじめ経済基盤の確立を旨としている。このような中で、開発件数と比例することく、埋蔵文化財の調査件数も増加しており、その保護対策も大きな問題をかかえている。本市における大規模な発掘調査は昭和50年代からはじまっており、これは本市の市街地変貌の時期とも対応している。今回の調査もやはり工場誘致に伴うもので、埼玉県選定重要遺跡旭・小島古墳群の範囲に該当する。

事業主体である株式会社山本製作所より本市教育委員会へ、当該地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて協議書が提出されたのは昭和59年5月1日であった。これに対して本市教育委員会では昭和59年5月21日付本教社発第96号で次のような回答文書を返送した。

1. 本市遺跡地図によると旭・小島古墳群の範囲内に所在し、遺物の散布が見られ、現状保存が望ましい。
2. やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条の2の規定により、記録保存のため事前に発掘調査を実施し、その旨を文化庁長官宛に届け出ること。
3. 調査実施にあたっては埼玉県教育局文化財保護課(当時)、本市教育委員会等と事前協議を徹底すること。

以上を述べた。

その後、本市では企画課が主催する各課調整会議が開催され、文化財に対する対処については上記の点について公表した。こうした中で、埼玉県教育局文化財保護課からも開発にたいする情報入手の連絡が入り、開発の実施は目に見えはじめた。以上のような経過をふまえている間、事業予定地も若干の縮小を見たが、一部は上里町も含まれていたため、事業設計者である渡辺設計事務所、本市教育委員会、上里町教育委員会の三者で昭和59年6月15日に本市役所で対応策を検討した。そして昭和59年7月12日には埼玉県教育委員会、本市教育委員会並びに、上里町教育委員会で協議したところ、県教育委員会の指導により、本市が主体となり記録保存のための発掘調査の必要性が指示された。この間、本市では数度にわたる事業主体者及び、その代理者と調整が進行し、調査実施計画の検討、保存措置の問題点をふまえて昭和59年7月20日に協定書の締結を完了した。現地での試掘調査は昭和59年8月7日より実施し、その結果、古墳址を確認したため昭和59年8月7日付本教社発第149号で、埋蔵文化財発掘調査通知並びに、発掘調査届を埼玉県教育委員会を經由して文化庁長官宛に文書を提出した。その後、試掘調査を継続し、発掘調査は9月1日より実施し、11月7日をもって全作業は完了したが、この間、県教育委員会の現地指導をうけた。また、上里町側にあつては、試掘調査に際して本市側のトレンチを延長し、同町教育委員会の職員立ち合いのもとに実施した。

第2節 調査の組織 (昭和62年度現在)

本庄市教育委員会

教 育 長	飯島 彰 (昭和59年9月30日まで)
"	坂本 敬信 (昭和59年10月1日より)

社 会 教 育 課

課 長	戸塚 克男 (昭和61年3月31日まで)
"	荒井 正夫 (昭和61年4月1日より)

指 導 主 事 矢崎 昭夫 (昭和61年3月31日まで)

課長補佐兼文化財 長谷川道夫 (昭和61年3月31日まで)

保護係長

" 小林 弘子 (昭和61年4月1日より)

係 長 (庶務) 小林 弘子 (昭和61年3月31日まで)

主 事 (庶務) 斉藤みゆき (昭和61年4月1日より)

文化財保護係 (主任) 長谷川 勇

" (主事) 増田 一裕

" (主事) 中田 啓一 (昭和61年3月31日まで)

" (主事補) 早野 秀之 (昭和62年4月1日より)

調 査 担 当 者 増田 一裕

調 査 作 業 員 地域住民 延800名

第3節 調査日誌抄

- 8月1日 朝8時30分現地に集合。発掘調査の内容、趣旨、労基法に基づき雇用の説明を作業員に伝達。バック・ホーにより西北側から試掘を開始する。
- 8月6日 バック・ホーによる周囲の桑等の抜根作業がづく。
- 8月8日 西側より設定したトレンチの内、第2トレンチより溝と石組みが検出されたため、周辺の表土剥ぎをする。古墳の周堀であり、第1号墳とする。
- 8月10日 第3トレンチで古墳の周堀を確認、第2号墳とする。この間第2トレンチの第1号墳を精査、横穴式石室と土師器を検出する。
- 8月18日 上里町7号遺跡の周囲を表土剥ぎし、周濠とその内側に半月状大土壌を検出。ローリングタワーを建て写真撮影。
- 8月29日 第2号墳の周堀を検出。南側で土師器が多量に出土。本日第2号墳の北東で新たに第3号墳を検出。南に石材が散乱する。石室の痕跡か。
- 8月31日 第3号墳の東側で第4号墳を検出。本墳もやはり南側に石室が存在するようである。現

状で遺物の量は極めて少ない。

- 9月3日 上里町7号遺跡は第5号墳と呼称する。ここより検出された半月状大土壇は深さ2m以上に達し、危険であるため一時中止。他古墳の断面実測等を行なう。
- 9月6日 第3号墳の横穴石室を写真撮影。第4号墳の石室を開掘する。根石と床面のみ残存しており、角閃石安山岩を使用している。遺物はほとんど見られず。
- 9月8日 第4号墳の周堀を発掘。石室前面より多量の土師器片が出土、真間期と考えられる。本日測量基準杭の設定完了。酷暑の日々がつづく。
- 9月18日 上里町側の試掘の承諾を得て、本日よりトレンチを設定、開掘にかかる。
- 9月21日 第2、3、4号墳の断面実測を行なう。第5号墳の半月状大土壇を完掘。
- 10月8日 第2～5号墳の全景撮影をローリングタワーを建て行なう。上里町側の試掘を終了。急に冷え込み、本日は18℃であった。
- 10月15日 朝より航空写真撮影のため待機。天候不順で6日間かかる。第5号墳の南側を開掘し半月状大土壇が周堀の一部であることを確認。なお、南側にて石室掘り方と石室材の切り石を発掘。横穴式石室の開口方向等が判明する。
- 10月18日 第2～4号墳の遺構平面図を作成する。周堀はみかけよりいびつであることが判明したが、古墳間の立地企画性に一助をあたえた。
- 10月22日 第1号墳の石室を開掘。同時に実測作業を平行して行なう。
- 10月29日 第1号墳の石室の写真撮影並びに、内部の完掘を完了する。遺物は石室前庭部に集中していたが、石室内には皆無であった。
- 11月1日 第5号墳の断面実測を行なう。南東に開口する横穴式石室の前庭部付近は攪乱により現位置を保たなかったが、石室後込めの範囲を確認した。須恵器蓋が出土している。
- 11月5日 全調査区域で実施した実測図の内、未実測部分等の確認を行ない、残務整理を行なう。
- 11月7日 調査地域全域をチェックし、器材の撤収作業を行ない、午後5時全作業を完了する。



写真1 重機による発掘調査風景

第2章 地理歴史的環境

第1節 地理的環境

本庄市の地形は、台地と低地に大別される。前者は本庄台地と命名されている。これは市の西方を流れる神流川により形成された扇状地性台地である。扇頂は群馬県多野郡鬼石町浄法寺で、埼玉県側には顕著な扇状地形を見せ、美里町を除く児玉郡内に広がっている。本庄市は丁度扇端部をひかえており、この部分は本庄段丘崖と呼称され、比高差6～10mの崖を形成する。これは本庄市小島万年寺より鶴森方面へ、北西から南東にかけて北方の利根川と平行するように走っており、ほぼ市街地の北側に位置する。崖下には湧水がある。その一つ、若泉の泉は若泉公園内に所在し、市民の憩いの場となっている。

前記したごとく本庄台地は河川堆積物による形成を示すため、地表下には10数mの砂礫層が観察される。同層の上位には関東ローム層が不整合に被覆する。上位よりソフトローム、板鼻褐色パミス、ハードロームの順に堆積するものの、黒色帯は見られない。また、層厚も貧弱である。これは給源火山から偏西風に乗じ、テフラが降下する範囲からずれている位置にあるためとも考えられるが、最近では浅間火山起源のU Gが南関東の立川ローム層においても検出されており、堆積の量には差があるものの、埼玉県内が浅間火山のテフラの降下範囲であったことは明白である。本庄市が大字西五十子で実施した土壌分析によれば、本庄台地上に堆積するローム内にはU Gが観察され、ローム自体も浅間火山に由来することが判明している。さらに、最下層からはATの純層が検出されている。ローム層上位に堆積する表土層、すなわち黒土は0.5～1mの層厚を測り、緻密には幾層にも分離可能である。その中には天明3年の浅間火山による浅間Aパミスも包含されている。以上のごとく、本庄台地の地質は第四紀に属し、立川面に比定される。なお、ローム層は大里ロームと命名され、北関東の上部ロームに対比される。

本庄市に広がる台地上には唯一の「山」、浅見山が市内南方に所在する。これは南方の上武山地山麓に形成された児玉丘陵の末端にあたるもので、周囲が侵食した残丘性丘陵である。標高は105mを数える。多摩面に比定されているが、被覆されるべき多摩ローム層はない。

主要河川としては台地上を女堀川と男堀川が東流している。両河川の周辺は沖積化が著しく、地目を見ると水田に反映されている。さらに、今井、四方田一帯に広がる条里制遺構の跡からもその範囲が伺われる。その他の地域にあっては桑畑等の畑地が広がる。他の河川としては市城南縁を流水する小山川があり、これは美里町方面に扇状地形を形成している。また、前述した本庄段丘崖下ぞいには元小山川がみられる。この河川と北方の利根川の間には低地地形を見せ、妻沼低地の上流部にあたる。ただし、低地地形ではあるが、詳細には微低地と微高地に分類され、水田に対する畑地並びに集落の分布によって見分けることができる。烏川の氾濫源であったことを物語っており、現在は場整備事業が進行して旧状はみられないが、旧白地図の水田部分を色ぬりすれば明確に河川跡が浮き出る。なお、台地上にはある特定の条件下のみ湧水し野水が流水する、いわゆる久上水と呼称される流路もある。

以上のごとく、本市市を特徴づける地形は、低地で標高40～48mを測り、台地上が標高52～70mを数える。また、台地上の等高線は神流川右岸に発達した扇状地形を明示するように、西から東へ湾曲しつつ低くなっている。

今回の調査地域は扇端近くの台地上で、段丘崖から南へ80m入った地点にあたり、主要な河川はまったくない。標高は61m前後を数え、北方に緩やかな傾斜を示す等高線が地形図上に描かれている。しかし、現地での見かけ上は平地である。地目はネギ畑、桑畑、雑木林、荒地、宅地等で、市内において多く見られた桑畑も少なくなり、戦前は雑木林が多かったという。現在ではJR高崎線と二本松通りにはさまれた、工場ベルト地帯とでも言うべき地目変化が目立っており、周囲の景観は大きく変化しつつある。

第2節 歴史的環境

本市市最古の遺物は、本調査地の北方900mに所在する、石神境遺跡で出土したナイフ形石器があげられる。また、近隣の三笠山古墳周辺においても舟底形石器、尖頭器などが採集されており、段丘崖付近に旧石器時代の遺跡が存在するものと考えられる。その他の台地上においてもナイフ形石器や細石刃、彫器などが単発的に出土しており、先に述べたATの存在などからかなり古い時期の石器も将来確認される可能性を残す。

縄文時代草創期の遺跡は浅見山（大久保山）に多く、爪形文、多縄文土器が採集されている。一方石器には笠ヶ谷戸遺跡、将監塚遺跡で有舌尖頭器が出土している。なお、将監塚遺跡においては縄文時代中期の大規模な集落跡が、児玉地方ではじめて発掘された。本調査地周辺からも、縄文時代の遺物は採集されており、古墳の調査等で土器や打製石斧が出土している。

弥生時代の遺跡は極めて少ないのが現状である。有望な遺跡としては、段丘崖上に位置する薬師堂遺跡と、浅見山に所在する遺跡より住居址が発掘されており、何れも丘陵部の谷か崖ぞいの沢と泉の存在する地理的条件下に立地する。本調査地の周辺ではつつじヶ丘住宅付近で一片のみ採集されている。

古墳時代に入ると遺構・遺物が爆発的に増加する。五領式期の遺跡は女堀、男堀両川流域に多く分布しており、周辺は後の条里制遺跡と重複する。旭・小島古墳群の範囲内には小島本伝遺跡より五領式土器が採集されている。集落跡は社具路遺跡、夏目遺跡、二本松遺跡、下田遺跡等で発掘されており、市内の主要遺跡が古墳時代であることを物語っている。この時期を特徴づける遺構に、和泉Ⅱ式期より住居内に造り付けのカマドが導入されることで、西富田二本松遺跡は学史上著名である。いわゆる初期カマドの類例は最近増加しており、南大通り線内遺跡第12号住居址からは数十点の遺物が出土している。

古墳時代を代表する古墳は、市内においてかつて200数十基ほど存在していたようである。最古の古墳は浅見山に所在する前山2号墳で、粘土槨が検出されており、隣接する前山1号墳はさらに古いものと予測される。古式古墳はその他に公卿塚古墳が見られ、西南部に突出部をもつ大型円墳で、叩

き目格子調整のある円筒埴輪が出土している。また、滑石製模造品も多量に出土しており、児玉町金^{カネ}銀神社古墳とともに著名な古墳である。旭・小島古墳群内では三笠山古墳が直径60m以上の規模を呈し、八幡山古墳には箱式石棺が認められ、何れも埴輪を持たないことから古式古墳と推定される。墳形には前方後円墳の二子塚古墳、帆立貝式の三笠山7号墳が見られる。しかし大半は円墳からなる。これら円墳の多くは6世紀後半から7世紀代にかかり、角閃石安山岩の切石や、河原礫を細かく積み上げたいわゆる模様積みの横穴式石室で、構造上遺存度が悪い。

古墳群には今回報告する旭・小島古墳群をはじめ、北原古墳群、塚合古墳群、鶴森古墳群、東五十子古墳群、西五十子古墳群、大久保山古墳群、久下塚古墳群、東富田古墳群などがあるものの、本古墳群が最も大規模で約100数十基で構成される。

奈良・平安時代では古墳時代について多くの遺跡が見られる。今井遺跡群は、本時代に出現するが特に古井戸・将監塚遺跡においては大規模な掘立柱建物群が検出されており、墨書土器などから児玉郡衙の可能性も指摘されている。なお、今井遺跡群の東方一帯に所在する西富田遺跡群の一つ、南大通り線内遺跡においては、「武藏国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」の線刻ある紡錘車が発見され、同遺跡が和名抄に記された草田郷の範囲の一部と推定され、西富田、今井両遺跡群が地方史研究上、重要な地域であることを示唆している。

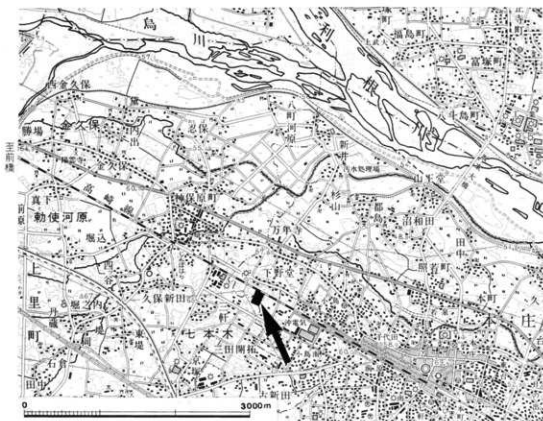
古代から中世にかけては、武蔵武士の出現と戦乱の時代である。本庄市周辺は児玉党の勢力範囲で多くの居館址が見られる。四方田氏館址などは遺存度がよい。児玉党に属する荘小太郎頼家は一の谷の合戦で優をさせたが、その墓は浅見山東麓の宥勝寺にあり、県指定文化財となっている。荘氏の本宗家である本荘氏は現代の本庄市の名のいわれになったが、本荘氏は大字栗崎周辺を根拠地として宇東本庄に館を構えていた。その後、段丘崖ぞいに移動して本庄城を建て、城下町を形成したようである。しかし、本庄氏は徳川氏によりほろぼされ、徳川時代には信州より小笠原氏が入城し城主となった。このころ、城の南を中山道が通過し、次第に宿場町が形成されるようになり、一時は中山道最大の宿場町となった。このため文人等知識人、武士、商人の文化遺産も多く残されるに至った。明治時代には児玉郡本庄町として郡役所が置かれ、今日では本庄・児玉広域市町村圏の中心となっている。また、都心部と上信越地方の中間にあたる地理的条件から、関越自動車道、国道17号線、JR高崎線など日本の動脈が走りぬけており、明日の本庄を象徴するかのごとく、その周辺の開発がめざましい。

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の方法

発掘調査場所は、本庄市の西方に位置する下野堂集落の南方で、JR高崎線を越えた付近一帯にあたる(第1図)。現状は本庄台地の北辺上の畑地にあたり、主として桑畑が営まれていたが、近年は周囲を取り囲むように工場、民家が密集する。事前の分布調査によれば、面積あたりの遺物散布量は極めて少なく、遺構は存在しても密集しないことが予測された。しかし横穴式石室に多用される角閃石安山岩が散乱していることや、聞き込み調査で古墳の存在が明確であったため、調査の主体は古墳の検出に重点を置いた。

調査は遺構の有無及び、範囲確認のための試掘調査から実施した。試掘トレンチは任意に南北方向へ設定した。主トレンチは幅2mのものを20m間隔で6本入れたが、これに加えて遺構の可能性がある部分等には補助トレンチを設定した。また、ボーリング、土層観察のための深掘も実施した。表土剥ぎはバック・ホーにより行ない、平面上で遺構が検出された部分については、拡大して広域に表土剥ぎを実施した。その結果、古墳址5ヶ所、時期不明の土壌若干が検出された。



第1図 発掘調査位置図(本図は国土地理院発行「高崎」1:50,000を転記した)



第2図 層位柱状図

第2節 遺構と遺物

古墳址は5ヶ所で確認された。古墳番号については山本製作所内第1～5号墳と呼称し、旭・小島古墳群の三田支群での通し番号は第1～4号墳をそれぞれ三田支群第11～14号墳に、第5号墳は三田支群の第6号墳に当たり、埼玉県遺跡地図では上里町第7号遺跡に該当する(第3図)。調査は古墳番号順に行ない、何れも円墳址で、内部構造は横穴式石室であることが判明した。

第1号墳 (三田支群第11号墳、大字下野堂字屋敷内 113-1、113-8)

墳形と周堀 試掘調査により最初に確認された。事業予定地内の北側に所在し、第2トレンチ上で周堀の一部が確認された。そのため、西側で第1トレンチとの間に補助トレンチを設定したところ、やはり周堀の端を検出したため周辺の全面発掘を行なった。盛土はほとんど残存せず、石室周辺に後込め土がわずかに認められた。周堀はローム層を掘り込んでおり、内側の輪郭は明瞭な円弧を描くが、外側は内外に蛇行する(第4図)。ほぼ一周するが、南側は不定形に蛇行している。南南西で1ヶ所とぎれており陸橋を形成している。この部分の幅は約1.3mを測る。深さは一定せず深浅状態が各所で見られ、最高深度はローム面より1mを数える。幅は最大3.5m、外形18mを測る。周堀の輪郭及び、内径から直径12mを数える円墳であることが判明した。

内部構造 南東に開口する横穴式石室で、今回調査した古墳中最も遺存状態が良好であった。ただし、耕作による擾乱はまぬがれず、上部は完全に破壊されていた(第5図)。構築方法は人頭大で扁平な河原礫を使用しており、玄室側壁が10段まで認められる。壁面の裏側には黒褐色土と暗黄褐色土の互層が観察され、石室の後込め土である。ちなみに砂礫は全く使用されていない。支門及び、羨門部は角閃石安山岩を部分的に加工して据え付けているが、他はすべてある程度一定した大きさの礫を積

第6トレンチの北側でJR高崎線付近にあたる部分を深掘し、本付近における基本層序を観察した。ただし、肉眼観察によるものであるが、以下のとおりである(第2図)。なお、調査地区南側一帯は洪水により色調、土質の変化が著しかった。

第I層 耕作土。黒灰色を帯び、乾燥するとバサバサで、灰のようである。地区内では一定の厚さを保たず、層厚40cm。

第II層 黒褐色土。旧表土に当たり、上層との間に浅間Aバミスを包含する。厚さ18cm。

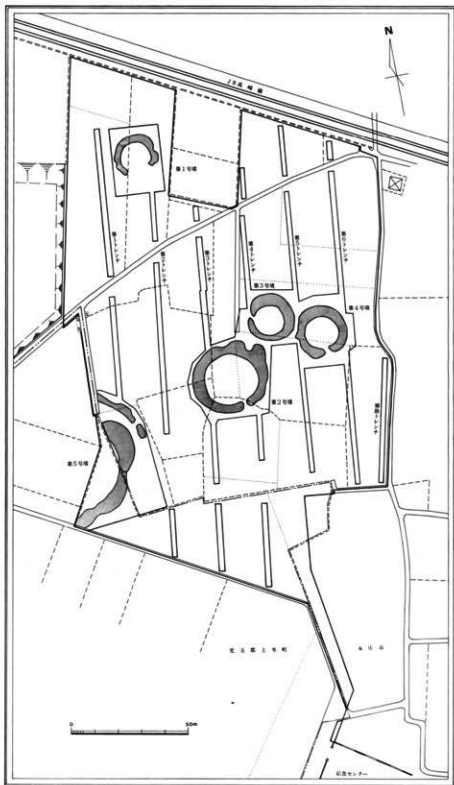
第III層 暗黄褐色土。砂質で下層との遷移層。厚さ26cm。

第IV層 黄褐色軟質ローム。厚さ32cm。

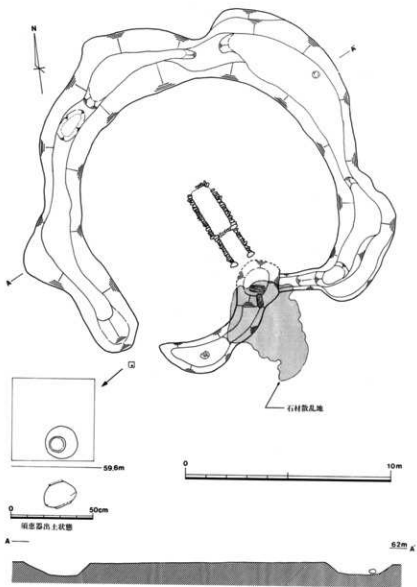
第V層 灰色味を帯びた硬質ロームと上位の軟質ロームが混在。厚さ56cm。

第VI層 淡茶褐色硬質ローム。白色の細かいバミス粒を含む。厚さ32cm。

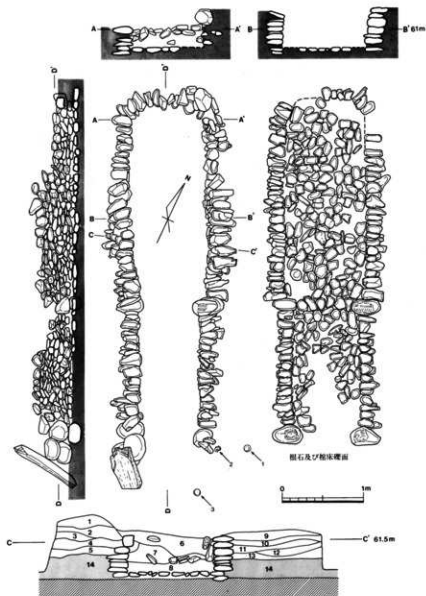
第VII層 砂礫層。礫の粒径は1～3cm大。厚さ8m以上。



第3図 調査地区内遺構配置図

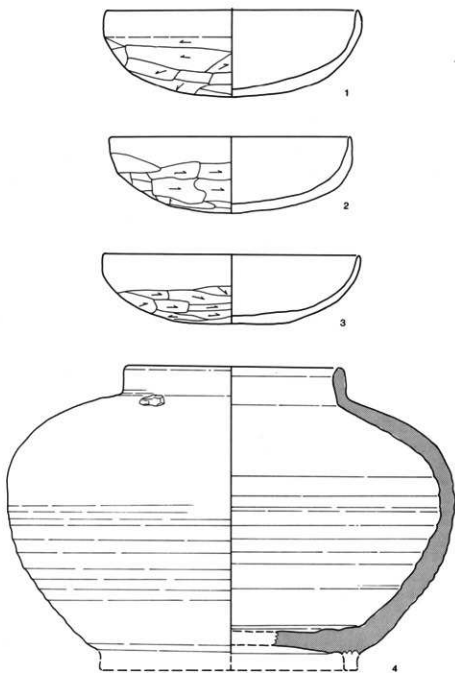


第4图 第1号墳平面・断面実測図



1. 耕作土層 2. 黒色土 (ロームブロック含む) 3. 暗黒色土層 4. 暗褐色土層 5. 暗黄色土層 6. 茶褐色土層 7. 黒褐色土層 8. 黒色土層 9. 黄褐色ローム置き土層 10. 暗黒褐色土層 (ロームブロック含む) 11. 黄褐色ローム置き土層 12. 暗黒褐色土層 13. 黒褐色土層 14. 旧表土層

第5図 第1号墳石室実測図



第6图 第1号墳出土遺物実測図

み重ねており、いわゆる模様積みの一種と考えられるが、所々に見られるべき大形の礫は見られなかった。羨門の左側に2個の角閃石安山岩と片岩の板石が倒立しているが、これらは転石である。後者は天井石の可能性がある。奥壁部は擾乱が著しく部分的に残存するのみである。床面は扁平な河原礫を玄室及び、羨道部に敷き詰めており、玄門部は一列に並べて境界としている。なお、玄室と羨道の床面レベルの差は認められない。壁面の根石は床面の敷石よりも2段高く設定されており、石材は壁部と同様のものを用いている。石室各部の法量は玄室長2.4m、幅1.0m、高さ0.5m以上、羨道長1.7m、幅0.8m、高さ0.48m以上を測り、プランは両袖式で胴張りが認められない。主軸の角度はN26°Eを測る。ところで、墳形プランと石室の位置関係については、玄室の中心部よりやや奥壁よりに墳丘中心部がもつめられ、石室の主軸は墳丘を二分するように設計されている。石室開口部と周堀の間には、幅0.6mを測る石室前庭部とも言うべき空間が存在する。この部分には後世の擾乱土壌があるが、さらに、南東へ4mの範囲で石材が散乱しており、石室破壊時に搬出散乱したものと考えられる。

遺物 石室正面以外の周堀内では全く出土せず、加えて墳丘部分と石室内も皆無に近い状態であった。遺物は石室正面に集中していた。散乱した石材の間からかなり多量の土師器坏片が出土しており、10数個体以上を数える。しかし、これらは現位置を保つものではない。一方、石室入口付近と右壁の外側に接して3枚の土師器坏が出土しており、内2点は完形品である。他に陸橋部分で須恵器有蓋壺が単独で出土した。器形及び、時期的に見て蔵骨器の可能性があるので、周辺を精査したが何も得られなかった。以上のように本墳の遺物は出土場所が限定されており、このようなパターンは後述する古墳すべてに共通している。最後に、石室内から得られた遺物としては鉄釘が玄室床面より1点出土したのみである(第6図)。

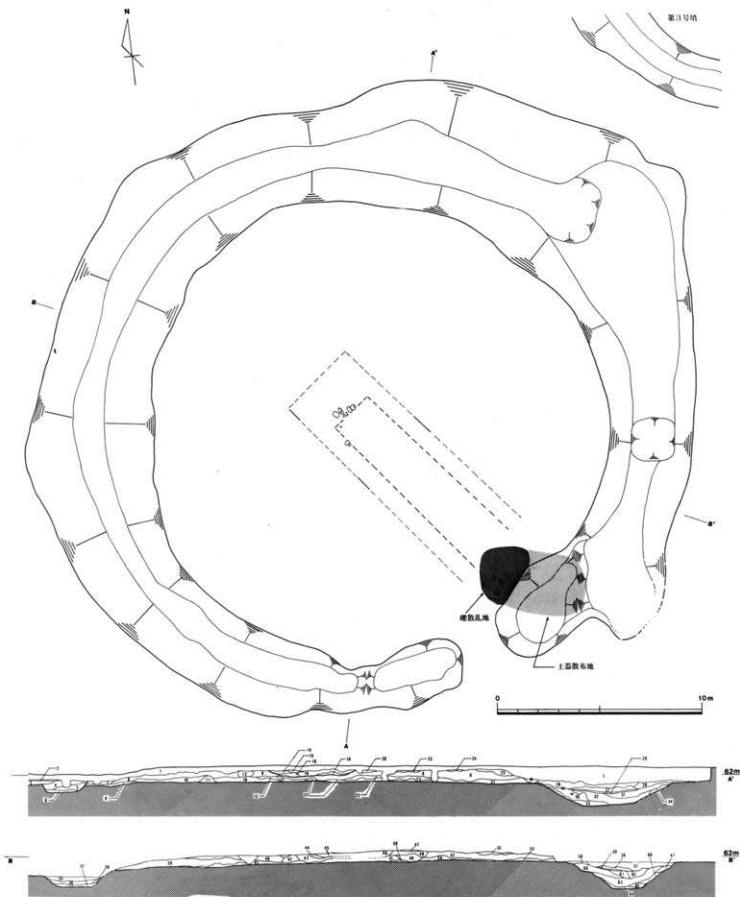
第1号墳出土土器観察表

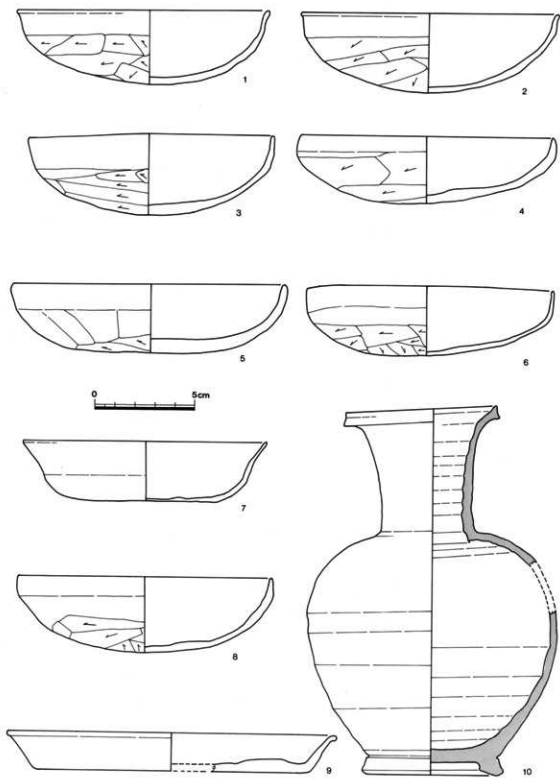
番号	器種	法量 (cm)	特 徴
1	坏	口径 12.0 器高 4.1	胎土・微細砂。整形・外面体部底部ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好、底部全面黒斑。色調・淡茶灰褐色。出土位置・石室正面右側封土内、No.1。残存量・完形品。
2	坏	口径 11.3 器高 3.5	胎土・微細砂。整形・外面体部底部ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好、全面黒斑。色調・淡茶褐色。形態・ややいびつ。出土位置・No.3。残存量・ほぼ完形品。
3	坏	口径 12.0 器高 3.2	胎土・微細砂。整形・外面体部底部ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好。色調・淡茶褐色。出土位置・No.2。残存量・ $\frac{1}{2}$ 。
4	短頸壺	口径 10.3 胴径 20.8 器高(14.1)	胎土・微細砂、石英粒、若干の小石。整形・ロクロ整形、胴部下内外に稜線多い。焼成・良好。色調・暗青灰色。出土位置・周堀内。残存量・底部中央部及び高台欠損。

第2号墳（三田支群第12号墳、本庄市下野堂字七本木境188-1、190-2、191、194-1、195-1）
墳形と周堀 発掘調査前より聞き込み調査や分析調査によってその存在が明確であった。また、角閃石安山岩の散乱も顕著であった。第2、3トレンチ上で周堀端部並びに、墳丘中心部を確認したため、周辺の表土剥ぎを実施した。極めて明瞭な周濠を有し、輪郭もほぼ円形に近いが、北東側は幅広くなっている（第7図）。堀の断面は逆台形状を呈し、南側及び、東側は浅くなっている。この部分は砂礫層が上位まで上がっているため、他地点はローム層下位まで掘り込んでいる。陸橋は南南東に1ヶ所認められ幅2mと狭く、周辺の堀の幅や深さも縮小している。堀の幅は最大8.1m、深さ1.2m、外径35m、内径は東西22.2m、南北22.6mを測る。直径22mの円墳で、盛土はほとんど認められないが、旧表土層の上部にわずかに黄褐色ロームが確認されたにとどまる。

内部構造 地表面に礫が散乱しており、横穴式石室の存在が予測された。しかし、かつてかなり多くの石を抜いたという聞き込み調査の話を裏付けるように、墳丘中心部付近と周堀内縁の南東部付近に若干の礫が散乱する程度であった。前者の石材はわずかに攪乱を免れた部分で、この付近の断面を観察すると、旧表土を掘り下げて石室の掘り方を造り、その中に盛土を行なって床面を形成し根石を置いている。攪乱のため部分的に残存する掘り方の輪郭を追跡し復原すると、その幅は4mを数える。残存する石材は奥壁の根石の一部と推定される。角閃石安山岩で東側の1個にはコの字状の溝が穿たれており、鏡石をはめ込んだものと推定され、同様な石材は後述する第3号墳にも存在する。一方、周濠よりの部分では細かい礫が無造作に散乱しており、その大きさから石室壁材とは考えられないが、何らかの施設の一部と思われる。この一群と墳丘中心部との間には、石材が確認されなかったが、両者を一連のものとして復原すると、本横穴式石室はN39°Eに主軸を置くものと推定される。

遺物 石室前面と推定される礫の散乱地点内と、その正面の周堀内より集中して出土した（第8図）。周堀内の一帯は後世に堆積したものである。土器の器種は土師器環が圧倒的で、形態は数種に分類される。他に周堀内より須恵器水甕が出土しているが、その周辺から鉄釘が少量に出土したため、追葬の可能性もあり、精査したが、遺構は検出されなかった。なお、他地点ではほとんど遺物が検出されず、墳丘部分より縄文土器片、打製石斧が若干出土したにとどまる。





第8图 第2号填出土遺物実測図

第2号墳出土土器観察表

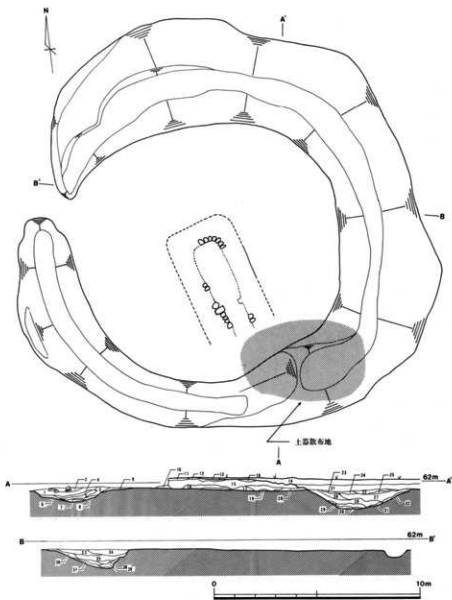
番号	器種	法量 (cm)	特 徴
1	坏	口径 12.6 器高 3.7	胎土・微細砂多量。整形・外面体部底部深いヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好、口縁部一部黒斑。色調・暗褐色。出土位置・石室正面。残存量・ほぼ完形品。
2	坏	口径 12.9 器高 4.0	胎土・微細砂多量。整形・外面体部底部深いヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。形態・1とまったく同一の製作品。焼成・良好、口縁部一部黒斑。色調・暗褐色。出土位置・石室正面。残存量・ほぼ完形品。
3	坏	口径 12.8 器高 3.9	胎土・微細砂。整形・外面底部ヘラケズリ、体部ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・普通。色調・橙色。出土位置・石室正面。残存量・ほぼ完形品。
4	坏	口径 12.3 器高 4.1	胎土・微細砂。整形・外面底部ヘラケズリ、体部ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・普通。色調・橙色。出土位置・石室正面。残存量・ほぼ完形品。
5	坏	口径 13.0 器高 3.4	胎土・白色粒子、微細砂少量。整形・外面底部ヘラケズリ、体部ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・普通。色調・橙色。出土位置・石室正面。残存量・ほぼ完形品。
6	坏	口径 13.8 器高 3.4	胎土・角閃石微細粒多量。整形・外面底部ヘラケズリ、体部ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・普通。色調・橙色。出土位置・石室正面。残存量・口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。
7	坏	口径 12.4 器高 3.5	胎土・微細砂。整形・外面底部ヘラケズリ、体部指頭ナデ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。形態・全体にいびつ。焼成・普通。色調・橙色。
8	坏	口径 12.1 器高 3.0	胎土・石英、角閃石微細粒多量。整形・外面底部ヘラケズリ、体部指頭痕及びナデ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好。色調・普通。出土位置・石室正面。残存量・ $\frac{1}{2}$ 欠損。
9	坏	口径 16.5 器高 1.9	胎土・微細砂。整形・外面底部ヘラケズリ、体部ナデ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好。色調・橙色。出土位置・石室正面。残存量・ $\frac{1}{2}$ 。
10	長頸壺	口径 7.5 胴径 12.6 器高 18.9	胎土・微細砂、石英粒。整形・ロクロ整形、内面に稜線多い、口縁部内面斜めにしぼりあげ。焼成・良好、口縁部内面一部及び口縁部外面から胴部上半に灰釉。色調・灰色。出土位置・周堀内。残存量・ほぼ完形品。

第3号墳（三田支群第13号墳、本庄市下野堂字七本木境194-1、195-1）

墳形と周堀 今回の調査で新たに確認された、第4、5トレンチ上で周堀両端を検出したため、周囲の全面表土剥ぎを行なった。2,500分の1地形図によれば、標高62mの等高線が東へ張り出しており、わずかにその存在を指示している。周壕は第2号墳と同様に明瞭で、東西にやや長い円形を呈する。先の第2号墳とは2mの距離をへだてて北東側に所在する。堀の断面は逆台形状をなしており、全体にはほぼ一定の深さで掘削されているが、南側の石室前面付近で1ヶ所浅くなっている。陸橋部は本墳のみ西側に設定されており、幅1.2mを測る。外径は21.5m、内径が東西13.2m、南北12.3mを測り、直径12mの円墳と推定される(第9図)。

内部構造 表土を剥ぐとすぐに石室根石、床面があらわれ、遺存度の悪さを物語っている。石室の構築方法は旧表土を約35cm掘り下げ、その中に黒褐色土とロームを互層にして盛り、石室内の床面にあたる部分は角閃石安山岩の砕片を混入してかなり固く突き固め、根石を設置している。石室の掘り方は復原すると幅3.35m、長さ6m以上、深さ0.35mを測る。石材の遺存度は悪く、奥壁根石と羨道部左側壁の一部などが検出されたにすぎない(第10図)。羨道部の根石材は主として細長い河原礫を用いており、玄門部は片岩板石を積み重ねている。玄室奥壁部の根石はすべて角閃石安山岩を使用しており、互いの接合部は加工されている。また、西よりの3個の上面には断面コの字状のホゾが穿たれており、おそらく片岩製の鏡石を組み込んだものと考えられる。玄室部の床面には、細かい礫が敷き詰められているものの、部分的に残存するのみである。ただし、羨道部には同様な礫はなく、図上の羨道内に見られる礫は壁材の落石である。根石が残存しない部分については、石抜き跡が確認されており、後述する復原作業から玄室長2.95m、幅1.3m、羨道長1.9m、幅0.85mで胴張りは認められない。N16°Eに開口する横穴式石室であることが判明した。なお、羨門と周堀の間は幅1.5mの空間が存在する。石室前面の周堀上には河原礫、片岩板石が散乱しており、おそらく後世の盗掘等によるものであろう。

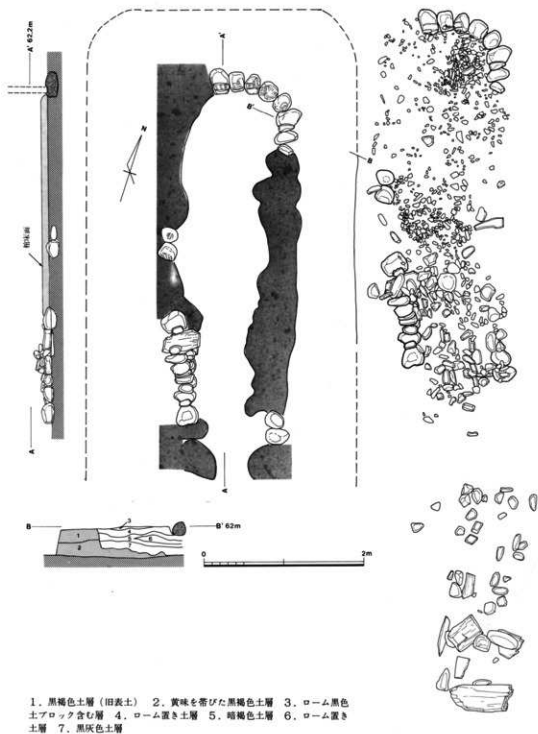
遺物 石室前面付近からその前方周堀内に集中して出土した。それ以外の墳丘部分や周堀内からはまったく検出されなかった。主として土師器で器種は坏に限定され、数形態に分類される。1点のみ須恵器の高台付き坏が出土している。なお、石室内からは奥壁よりの床面上で円筒地輪片が出土している(第11図)。



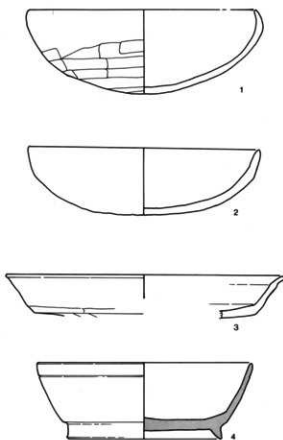
第3号墳土層観察表

1. 黒褐色土 2. 黒灰褐色土(石室材の転石多い) 3. 黒褐色土 4. 黒褐色土(細かいローム粒含む)
 5. 黒色土(3cm大のローム・ブロック多量に含む) 6. 暗黄褐色土 7. 暗黄褐色土(ローム粒多量に含む)
 8. 黒色土 9・10. 田表土(同層の下位でローム層への遷移層) 11・13・14. 耕作土 15. 暗黄褐色土(田表土) 16. 暗茶褐色土(軟質) 17・19・20. よごれた暗黄褐色土 21. 暗褐色土 22. 黒灰色土 23. 26と同(軟質) 24・25. 黒灰色土(粒径大きい) 26. 黄褐色土 27. 黒褐色土(黄色ローム多量に含む) 28. 黄味帯びた黒褐色土 29. 暗黄褐色土 30・31. 黄褐色ローム・ブロック 32. 暗黄褐色土 33. 34と同(黄色ローム粒多量に含む) 34. 暗茶褐色土 35. 黒褐色土 36. 淡茶褐色砂質土 37. 淡褐色土 38. 淡褐色土(黒土ブロック含む) 39. 淡茶褐色土(細かいローム・ブロック含む)

第9図 第3号墳平面・断面図



第10図 第3号墳石室実測図



第11図 第3号墳出土遺物実測図

第3号墳出土土器観察表

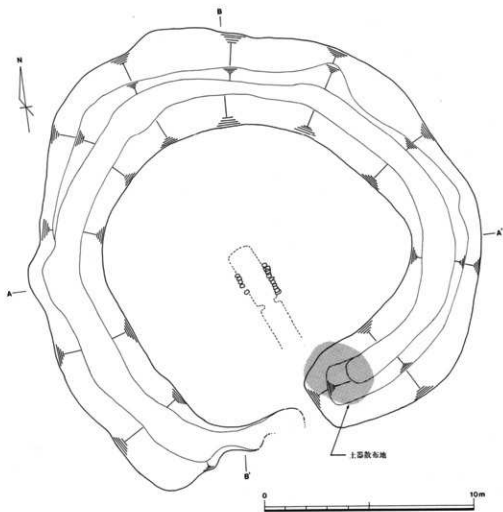
番号	器種	法量 (cm)	特 徴
1	坏	口径 12.2 器高 4.5	胎土・角閃石、白色粒子、微細粒多量。整形・外面体部底部ヘラケズリ、内面ナテ、口縁部内外面ヨコナテ。焼成・良好、外面底部黒斑。色調・橙色。使用痕・内面炭化物附着。出土位置・石室正面、No1。残存量・ほぼ完形。
2	坏	口径(12.0) 器高 3.5	胎土・角閃石、石英。整形・外面体部底部ヘラケズリ、内面ナテ、口縁部内外面ヨコナテ。焼成・普通、外面底部黒斑。色調・外面淡褐色、内面橙色。出土位置・石室正面、No2。残存量・ $\frac{1}{2}$ 。
3	坏	口径(14.9) 器高 (2.3)	胎土・角閃石微細粒多量。整形・外面底部ヘラケズリ、内面、口縁部内外面ヨコナテ。焼成・良好。色調・橙色。出土位置・石室正面。残存量・口縁部若干のみ。
4	坏	口径(11.4) 器高 (4.0)	胎土・石英微細粒多量。整形・ロクロ整形、外面底部ヘラ切り後高台付け。焼成・やや粗悪。色調・淡灰色。出土位置・石室正面。残存量・約 $\frac{1}{2}$ 。

第4号墳（三田支群第14号墳、本庄市下野堂字七本木境 194-1）

墳形と周堀 本調査により新たに確認されたもので、事業予定地東端にあたる。第3号墳の東に接しており、両者の距離は1.3mを数える。墳丘盛土は残存していないが、石室周辺に後込めの盛土が認められた。他の部分は桑の根等による攪乱が著しい。周堀は北辺部が半円形に廻るのに対し、南半部はかなりいびつで、一見して方形に見える（第12図）。断面は逆台形状を呈する。全周を通して深淺の変化はないが、南側で地形自体が低くなっているため、堀も浅くなり不明瞭となる。この部分で陸橋を形成しており、同時に石室の正面にあたる。幅は0.8mを測る。各計測値は外径22m、内径12m、深さ0.9mを測る小形円墳である。

内部構造 前記した各古墳と同様の南東に開口する横穴式石室である。しかし、これまた遺存度は悪く、平面プランの一部を残すのみで、玄室奥壁部は攪乱により消滅している（第13図）。側壁は組み合わせ部分を加工した、人頭大の角閃石安山岩を用い、一部に長さ15cm前後の河原礫を混在して構築され、2段目まで残存する。この2段目が床面にあたり、内部に5～10cm大の河原礫を敷きつめており、厚さ8cmを測る。玄室部の礫床の残存は良好で、南側ではほぼ一線をひくようになくなる。側壁根石もここで一旦とまっており、ここが玄室部と考えられる。また、根石の抜き取り痕もしくは、掘り方が確認された。羨道部にあたる箇所からは、およそ2mの範囲内で20cm大の河原礫が散乱していたが、原位置を示す石材は認められなかった。ただし、玄門部から南方には石抜き痕が検出されており、羨道内側の輪郭をたどることができる。以上の内容をもとに復原すると、玄室長2.1m以上、幅1.2m、羨道長2.5m内外、幅0.8mを測り、N22°Eに開口する、胴張りのない横穴式石室であったことが判明した。ところで、本石室の場合も掘り方が若干確認されている。東端の一部に残存しており、断面の観察によると旧表土を掘り込み、その中を版築状に突き固めた上で、根石を設置している。礫床面下は角閃石安山岩の砕片を混じて叩き締められており、全体を通した構築方法は第3号墳と全く同様である。また、推定される羨門部と周堀の間に空間が存在することも同様である。

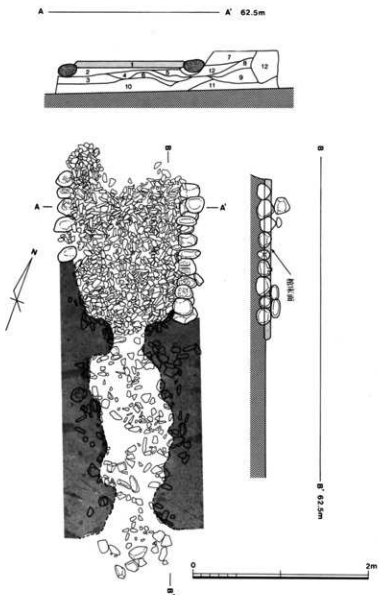
遺物 出土状態、出土箇所については第1～3号墳とまったく同様で、本古墳群における一つの共通性を指摘できる。石室前面の周堀上から出土した遺物は土師器坏を主体としており、散乱状態であった。その他の地点では皆無である（第14図）。



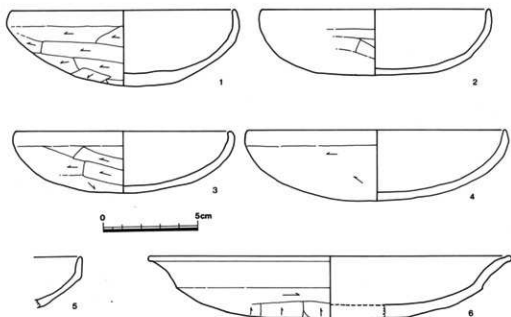
第4号墳土層観察表

1. 黒色土 2. 黒褐色土 3. 黒褐色土 (ローム・ブロックまばらに含む) 4. ロームを多量に含む黒褐色土 5. 黒褐色土 6. 褐色土に黒色土ブロック含む 7. 黒色土 8. やや明るい黒色土 9. 暗黄褐色土 (ローム・ブロック含む、礎の東は暗褐色土) 10. 黒色土 11. 明黄褐色土 12・18. 暗黄褐色土 13. 黒褐色土 14・15. 明黒褐色土 16. ローム・ブロック 17. 明黒褐色土 (ローム・ブロック含む) 19. 茶味帯びた黒褐色土 20・22. 灰味帯びた暗茶褐色土 21. 20と同 (ローム・ブロック含む) 23. 黒味帯びた暗茶褐色土 24. 黒褐色土 25. 淡褐色粘土ブロック 26. 暗褐色土

第12図 第4号墳平面・断面実測図



第13図 第4号墳石室実測図



第14図 第4号墳出土遺物実測図

第4号墳出土土器観察表

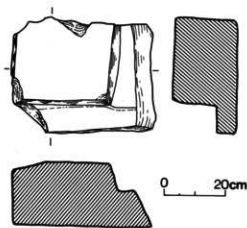
番号	器種	法量 (cm)	特 徴
1	坏	口径 12.3 器高 4.0	胎土・角閃石、長石多量。整形・外面体部底部ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好。色調・淡褐色。出土位置・石室正面No2。残存量・ $\frac{2}{3}$ 。
2	坏	口径 11.7 器高 3.3	胎土・微細砂多量。整形・外面体部底部ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好。形態・記壁薄手。色調・明褐色。出土位置・石室正面No1。残存量・ほぼ完形品。
3	坏	口径 11.7 器高 3.3	胎土・石英微細粒多量。整形・外面体部底部ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好。形態・大形品で、体部外面の整形不明瞭。色調・暗褐色。出土位置・No4。残存量・ $\frac{1}{4}$ 。
4	坏	口径 12.3 器高 3.5	胎土・微細粒多量。整形・外面体部底部ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好。色調・暗褐色。出土位置・No6。残存量・ $\frac{1}{2}$ 。
5	坏	器高 (2.7 以上)	胎土・微細砂。整形・口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好。色調・橙色。残存量・口縁部一部のみ。
6	坏	口径 19.3 器高 (3.4)	胎土・微細砂。整形・体部底部外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。焼成・良好。色調・橙色。残存量・ $\frac{2}{3}$ 。

第5号墳（三田支群第6号墳、上里町第7号遺跡、本庄市下野堂字七本木境 188-1、児玉郡上里町七本木字三田3580-1、3581、3582-1、3582-2）

墳形と周堀 事業予定地内の西側にあたり、この付近で唯一盛土を残す古墳である。今回の調査対象地域は墳丘の南及び、東側のみで、墳丘自体は該当しない。現状は雑木林と畑地で、南東側に見られる露頭面によると、黒褐色土と暗黄褐色土の互層が観察され、同様な構築方法は本庄135号遺跡（古墳）においても見られる。発掘調査範囲内では当初、第1トレンチの延長上で幅4m、深さ0.6mの浅い溝状遺構が円弧を描いて検出された。さらに、その内側において墳丘部との間に長さ23m、幅10m、深さ2.2mの半月状大土壌を検出した（第16図）。これは堀としては異常な深さで、性格不明な点もあり南側へ追跡したところ、まったく深さは異なるが、平面的には周堀の一部で連続していることが判明した。したがって、本墳は二重周堀を持つことになる。ただし、外側の周堀は東側でとぎれており、南側は認められない。内側の周堀は南側で浅く、断面が皿状を呈する。なお、陸橋部は調査範囲内で確認されなかった。一部に半月状大土壌と言うべき深掘部をもうけたことについては、おそらく墳丘盛土に用いる土砂採取のためとも解される。内側周堀の輪郭については、完全な円弧を描かないが、内縁部の輪郭から本墳は直径42mの大形円墳であることが判明した。

内部構造 調査前より横穴式石室の存在が予感された。墳丘内の調査を行っていないため、全容は判明していないが、南側の周堀内縁と残丘部の間で、長さ6mの範囲内に石室の掘り方が検出された。ローム面上にわずかに残存しており、上部は二次堆積や攪乱が著しく、かつ、上位に天明3年の火山灰が覆っていることから、かなり早く盗掘等にあった可能性がある。掘り方は断面観察によれば旧表土及び、暗黄褐色土を約50cm前後掘り下げており、幅は9.5mを測る。比較的大形の河原礫の垂角礫が包蔵されているが、掘り方の肩付近は両側とも積み重ねられた状態が観察され、間に砂礫が充填されている。しかし、石室中心部に近づくほど乱れており、後込めの石材と石室材の区別はつかない。ただし、中央部で角閃石安山岩の切石数点が出土しており、これらは精巧な加工を行っており

小島御手長山古墳の石室を想起させるものである（第15図）。また、掘り方の左半で周堀縁に添って、石室主軸に直行する状態で、角閃石安山岩の円礫が8個並べられており、開口部の施設の一部と考えられる。以上の点から言及されることは、主軸をN31°Eに置き、切石を用いた大規模な横穴式石室の存在を予測できる。

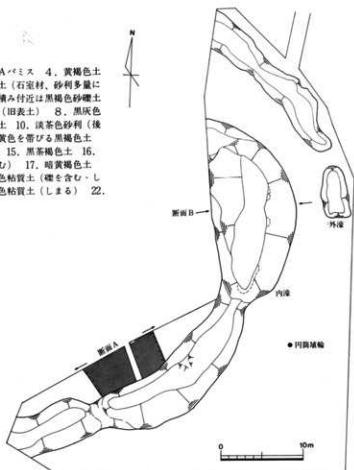


遺物 やはり石室前面付近に集中していたが、石室の掘り方内における土師器は砂片であった。他に須恵器片が若干見られたが、約6m離れて接合されたものもあり、攪乱の度合を指示している。そのような中で1点のみ須恵器蓋が周堀底

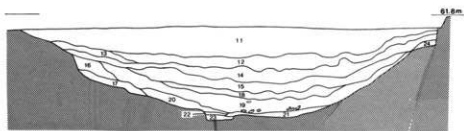
第15図 第5号墳出土石室材実測図

第5号墳土層観察表

1. 近年の盛土 2・3. 浅間Aバミス 4. 黄褐色土 (砂利を含む) 6. 黒灰褐色土 (石室材、砂利多量に含む・大半はかく乱で両側の控積み付近は黒褐色砂礫土が充填される) 7. 黒褐色土 (田表土) 8. 黒灰色土 (やや粘質) 9. 暗黄褐色土 10. 淡茶色砂利 (後込め) 11. 灰褐色土 12. 淡黄色を帯びる黒褐色土 13. 暗黄褐色土 14. 黒灰色土 15. 黒茶褐色土 16. 黒褐色土 (ローム・ブロック含む) 17. 暗黄褐色土 18. 黒灰褐色砂質土 19. 黒褐色粘質土 (礫を含む・しまる) 20. 黒色土 21. 暗褐色粘質土 (しまる) 22. 暗黄褐色土 23. 黒褐色土



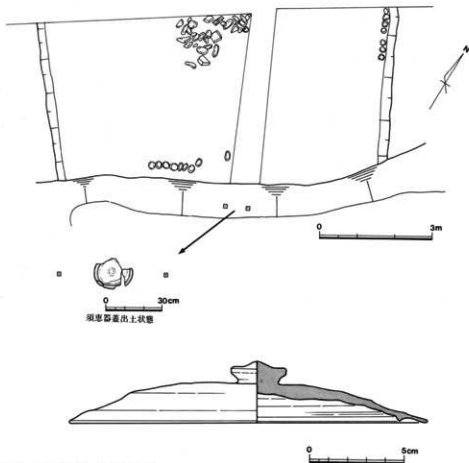
断面A実測図



断面B実測図

第16図 第5号墳平面・断面実測図

部より出土しているが、疑宝珠つまみである点、本墳の築造時期を直接決定できる資料ではない（第17図）。なお、南東部の周濠外より円筒埴輪片が若干出土した。



第17図 第5号墳出土遺物実測図

第5号墳出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	特 徴
1	坏蓋	口径 19.0 器高 3.2	胎土・角閃石、石英。整形・ロクロ整形。焼成・粗悪。色調・黄灰色。 出土位置・石室正面周壕。残存量・ほぼ完形。

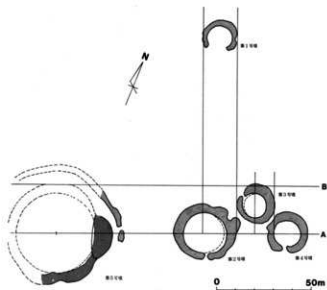
第4章 考 察

第1節 遺構と遺物

墳丘築造の企画性 周知であった第5号墳に加えて、今回4基の円墳が確認された。これらは第1号墳をのぞき、互いに近接する距離内で築造されている。したがって、相互に関連した企画性のもとに順次築造された可能性がある。5基の古墳の内、第5号墳は時期的にも通り、直径42mを測る盟主級古墳であることから、本墳を出発点として築造順位を追跡する(第18図)。

第5号墳と第2号墳及び、第4号墳の墳丘中心点はそれぞれ一直線上に並ぶ。これを主軸Aと呼称する。次に第2号墳の周堀東外縁に接した主軸Aから、直角に北へ振った線上及び、第4号墳の墳丘西部にかかる主軸Aより、やはり直角に北へ振った線上に、第3号墳の周堀両側外縁が通過する。さらに、第5号墳の復原された周濠北裾より、主軸Aと平行する線上に、第3号墳の墳丘北裾がほぼ接している。

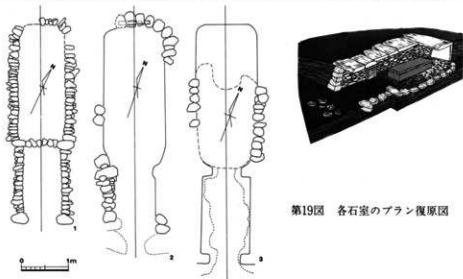
これらに対し、第1号墳は一見して孤立しているように見える。しかし、第2号墳の墳丘中心点から主軸Aを直角に北へ振った延長線上並びに、同じく同墳の周堀東外縁を直角に北へ振った線が、第3号墳の周堀西外縁に接して通過し、その延長線上に第1号墳の周堀東外縁がほぼはさまれた状態で立地することになる。以上のように第1～5号墳のすべてが統一された企画性のもとに配置されていることが判明した。第1、3、4号墳は出土土器や横穴式石室からはほぼ同時期の構築物と推定されるが、その順位は第5号墳から第2、4、3、1号墳へと築造されたことになる。なお、主軸Aの設定は、これに直行する線が第5号墳をのぞく各古墳の石室主軸に近い角度を示しており、古墳全体の築造企画を意図して線引きされた可能性がある。



第18図 第1～5号墳の配置企画図

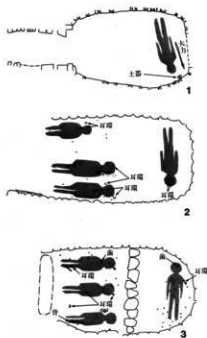
横穴式石室 第1～5号墳の内部構造は、すべて横穴式石室であった。第5号墳を除く各古墳は発掘により、平面プランに関する資料が得られた。しかし、それぞれに遺存度は悪く図上復原を試みなければならない。第3号墳はほぼ根石のみ残存していたとどまるが、玄室部は奥壁付近の右側壁根石と、中央部の左側根石の存在により、幅が1.3mであることが判明する(第19図)。羨道部は羨門付近の両側根石の存在により幅0.85mを測る。両部分の幅から石室の主軸をもとめるとN16°Eに開口している。玄室長は2.95m、羨道長は現状で残る根石の前方に石抜き痕が両側に検出されており、これを羨門根石痕とすると長さ1.9m前後となる。奥壁根石には鏡石を設置したホゾ穴が穿たれている。左側根石が消失しているが、先の主軸から二分すると、その幅は0.85mを数える。

第4号墳も第3号墳と現状は同様であるが、奥壁部は不明である。玄室部の両側根石により、その幅は1.2mを数えるが、羨道部と推定される部分には全く石材がない。しかし、石抜き痕によりその輪郭が判明している。玄門及び、羨門の根石痕が石室内側に張り出しており、これにより主軸をもとめるとN22°Eに開口することが判明する。羨道長はおおよそ2.5mを測り、玄室長は2.1m以上である。第3号墳と同様な規模と推定される。また、両者はともに加工された角閃石安山岩を根石に使用されており、形態や数値から築造時期の同時性を示唆している。一方、最もよく壁面が残存していた第1号墳は数値上第3、4号墳と同じく、小形の両袖式横穴式石室を示すが、壁材は玄門及び、羨門



第19図 各石室のプラン復原図

部以外は根石を含め、すべて河原礫を用いている点異なる。第1、3、4号墳の3者とも床面に礫を敷くが、第1号墳は扁平な礫の貼り床で、第3号墳がガラス状、第4号墳では20cm大の棒状礫を敷きつめている。第1～4号墳の石室周辺において散乱していた石材を観察すると、大形の礫は見られず、壁面の構築技法は塚本山古墳群など児玉郡内で通常見られるような、いわゆる模様積みではない。これは大形の礫が入手困難な状況下にあったためと考えられる。石材の内、片岩類はおそらく天井石と思われるが、個体数が少なすぎる。これは板碑等として後世に転用されたためとも解され、周辺に庚申塔が所在することからも暗示している。石室の設置は旧表土を掘り下げ、内部を版築状に突き固めて床面としており、側壁後込めにはまったく砂礫が使用されていなかった。また、石室自体が小形化



第20図 玄室内の遺体配置状態

しており、このような傾向は終末期に見られ、推定年代は7世紀後半期にかかるものと考えられる。これに対し第5号墳は方形の切り石を使用したり、石室の後ために礎を多用していることなどから7世紀前半まで遡るものと推定される。

ところで、第1、3、4号墳の玄室規模は復原図のごとく小さく、伸展葬で一体の収容ができる程度の大きさである。市内で発掘調査がなされた御手長山古墳（7世紀初頭）や塚古墳群第41号墳（7世紀中葉）の場合など、人骨と遺物配置の状態から少なくとも3、4体の埋葬を見るが（第20図）、第1、3、4号墳においては、横穴式石室本来の家族墓的性格あるいは、機能は有しなくなったものと考えられる。以上の見地から見た本古墳群の築造順位は第5号墳→第2号墳→第3、4号墳→第1号墳への変遷が推察される。なお、胴張りの企画がほとんど認められない点も注目される。

土 器 古墳関係の遺物の大半は土器類であった。これらの出土状態はすべて石室正面の羨門付近や、その前面の周堀内のみという共通点が認められた。しかし、ほとんどが周堀内の2次堆積内よりの出土であったため、旧状について復原を行う必要がある。第1号墳からは唯一石室羨門付近において3点の土器器坏がほぼ原位置を保って検出されており、これらは石室正面で実施された墓前祭祀に用いられた産物と考えられる。現状でほとんどが周堀内に散乱していたが、羨門部と周堀の間に空間が観察され、この部分に設置されていた可能性が大きい。いわゆる石室前底部の石組等施設と見られる遺構は判明しなかったが、陸橋から羨門部までの墓道などを想定すると、前述した墳丘内の空間の存在が示唆される。この空間に置かれた土器は土器器坏を主体とし、器種にかたよりが見られる。

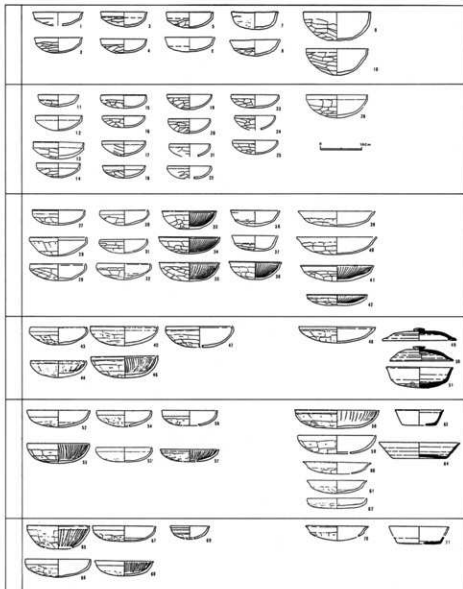
坏は数種類に分類される。これらの編年の位置づけについては、現在児玉郡市を中心とする各報告書等に多くの試案が出されている（中村 1978、坂本 1978、増田 1977、鈴木 1984、他）。以下にこれらの成果をもとに分類と変遷を行って見る（以下第21図）。1類は口縁部と体部が稜線で区画されており、口縁部は直立する。鬼高田式期に出現し真間式の中にも見られる。2類は口縁部が内湾しており、体部は深い。真間式の中に多く認められるが、中村試案によれば氏の第Ⅲ段階で、鬼高田式期にすでに出現すると言う。3類は直立する口縁部から不明瞭に底部へ移行する。全体に深く椀形に近い。4類は非常に薄い体部で直立ぎみの口縁部に扁平な底部を持つ。時間的には前者より新しい。5類は短い口縁部に浅い底部が付き、口径は大きい。盤もしくは皿と分類される可能性がある。6類は外反する口縁部が短く、稜線をもって体部と分類される。口径が大きく、底部は浅い皿に近い形態である。中村試案の第Ⅳ段階、岡部町六反田遺跡の編年では第11期より第13期の範囲で認められ、真間

式期に特徴的である。

これらと同様な土器を多く出土した本庄市に隣接する塚本山古墳群では、4を除きその編年観について考察されている。すなわち、1を鬼高田式期に、他は真間式期に位置づけられている（増田 1977）。以上を総括すれば、本古墳群の第1号墳は2、3類を主体とし、第2号墳からは2、3、5類を主体としており、同例は塚本山古墳群の第29号墳に求められる。なお、本時期にかかる土師師環類の編年試案については、鈴木 1984に詳細がふれられており、第22図に参考として引用した。



第21図 土師師環の分類

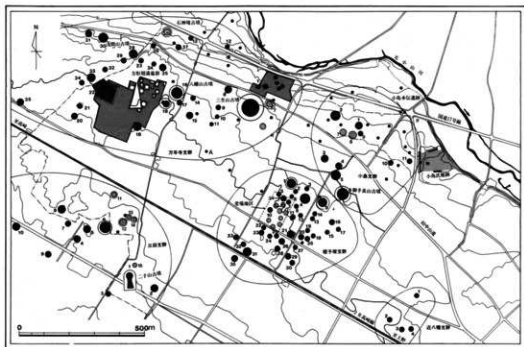


第22図 北武蔵系土師師環の鈴木編年試案(部分)

第2節 旭・小島古墳群の消長と性格

本古墳群で最初に墓地として選定された地域は、下野堂周溝墓群である。第10号墓は5世紀第1四半期と推定され、五領Ⅳ式期に比定されている(塩野 1984)。他の周溝墓については和泉式期すなわち、5世紀後半と発表されている(並木 1976)。一方、最初に古墳葬制を採用したのは、周溝墓群の東側に接する八幡山古墳及び、さらに東方に所在する三笠山古墳とその周辺をあげうる。八幡山古墳と周溝墓群の両者で最も近接する距離はわずか30mを測り、後述する八幡山古墳の推定年代から、両者は異なる葬制を示すものの、両被葬者が血縁的同族集団であった可能性を示唆している。八幡山古墳の内部主体は古くより知られており、片岩を使用した箱式石棺である(大護 1956)。本地域における箱式石棺の消長は、5世紀後半から6世紀前半に至るが、本古墳では現状で埴輪等が確認されていないことなどから、5世紀後半から末葉ごろまで遡るものと推定される。

今一つの古式古墳である三笠山古墳は、周堀の調査(本庄市 1984)、墳頂部の試掘調査が実施された(本庄市 1986)ものの、石材や粘土などの埋葬施設を示す遺構が検出されず、遺物も皆無に等しいため不明な点が多い。しかし、おおむね5世紀後半から末葉ごろに所属するものと推定される。この古墳の北方には6基の古墳址が発掘調査されている(本庄市 1984)。この内、三笠山1号墳の内部主体は礎柳で、同2号墳からはB種ヨコハケ円筒埴輪が出土しており、付近一帯が旭・小島古墳群発生の地であったことが指摘されている(大東 1983)。なお、本地域の東東方約600mに所在する小島本伝遺跡は、五領式期から和泉式期に属する集落跡で、距離及び時期的な関係から周溝墓群と関連



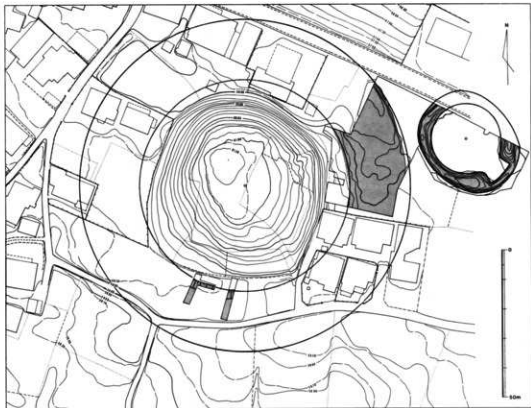
第23図 旭・小島古墳群分布図

するものと考えられ、墓域の拡大とともに周辺の集落は移動した可能性が暗示されている。⁽³⁾(第23図)

ところで、八幡山古墳は直径43m、三笠山古墳が直径69mとそれぞれ墳丘規模から盟主級古墳に該当する。三笠山古墳では最近近接した位置で帆立貝式古墳の三笠山7号墳が検出された(本庄市1984)。規模は全長28.7mと三笠山古墳を上回るものではないが、墳形と被葬者の性格を考える上で重要な指示をあたえており、あるいは職掌的な差によるものであろうか。(第24図)

八幡山古墳には2基の古墳が近接している。その一つ万年寺支群第18号墳は、昭和55年度に本庄市教育委員会が試掘調査を実施している。墳丘部は未調査であるが、周堀の輪郭が確認されており、外縁と内縁の円弧が同心円状ではなく、帆立貝式古墳となる可能性がある。伝承では勾玉、鉄剣等が出土したと言う。(第25図)

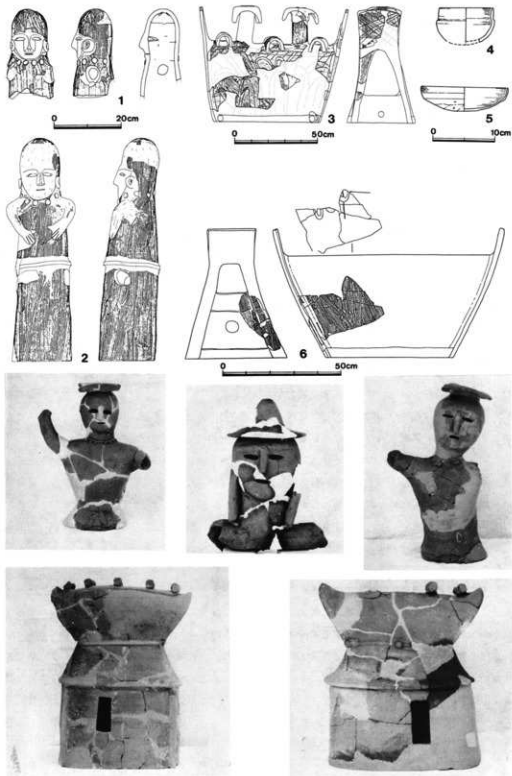
三笠山古墳の規模は県下でも有数の直径を測り、本古墳群においては突出した数値を示すが、八幡山古墳の直径43mに近似する大きさを示すものとしては、御手長山古墳、本調査にかかる第5号墳が見られ、上里町側にあつては浅間山古墳が該当する。これらの分布の在り方は、各支群の盟主的な位置づけを示しており、いずれも7世紀代にかかる。したがって、先の帆立貝式古墳もしくはその可能性のある古墳を伴う大型円墳が5世紀末ごろにかかるのとは様相が異なる。



第24図 三笠山古墳と三笠山7号墳(帆立貝式)測量図



第25図 八幡山古墳周辺測量図



第26図 旭・小島古墳群各地出土の埴輪等集成図(1~3 御手長山古墳、4・6 蛭子塚支群第1号墳、5 蛭子塚支群第2号墳、下写真 石神境古墳)

前記した古式古墳を含む周辺地域を包括して「万年寺支群」と命名しているが、これらはさらに小グループに別れる。同支群の北側に位置する石神境古墳は、昭和60年度に本庄市教育委員会が発掘調査を実施している。直径18mの小形円墳で、内部主体は完全に消滅していたが、墳麓部には原位置もしくは原位置に復元可能な状態で、人物埴輪4体、馬埴輪1体、家埴輪2軒、円筒埴輪多数が出土している。円筒埴輪には半円窓透しがあり、6世紀前半から中葉に位置づけられるものと推定されるが、本古墳群ではこの時期の古墳がほとんど未解明であり、貴重な資料を提供している。内部主体についてはまったく不明であるが、推定される時期から竪穴式石室か初期の横穴式石室と考えられる。

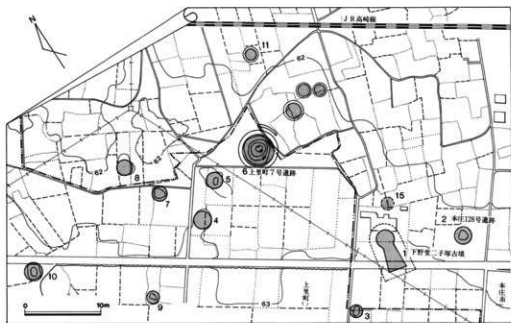
その他ある程度の内容が把握されている古墳としては、上里町浅間山古墳、万年寺稲荷山古墳に横穴式石室材として角閃石安山岩が使用されており、万年寺集落の周辺においても石垣などに石室材に使用されたと推定される角閃石安山岩が多く観察することができ、周辺の古墳の大半が7世紀代にかかる終末期古墳で構成されているものと推察される。なお、上里町側においては、埼玉県遺跡調査会の発掘成果（並木 1976）から、やはり終末期古墳で構成される一群が確認されている。以上のごとく万年寺支群の消長で言及できることは、周溝墓発生時点で碧玉製石剣といった畿内前期古墳葬制にかかわる遺物を保有する被葬者が存在し、同時点ですでに古墳葬制が出現可能な状況下にあったことを指示している。次の古墳出現段階には、県内でも少数かつ、大形の古墳が築造されるに至っている。八幡山古墳の箱式石棺は周辺でははじめて採用されるが、同時期ごろに畿内の大王墓等に使用されているのが長持形石棺であり、この影響も考慮しておく必要がある。現状において本支群で今後解明されなければならないことは、6世紀代の古墳が資料的にほとんど欠落していることで、古式古墳と7世紀代の終末期古墳がどのように継続されているか検討する必要がある。

万年寺支群の東方には「小島・蛭子塚支群」が分布する。現状は円墳からなり、現在確認されている上限は蛭子塚支群第1号墳より鬼高Ⅱ式の冢、竪穴形家埴輪などが出土している。しかし、確実に多く築造されたのは、御手長山古墳に代表されるごとく7世紀代に入ってからで、角閃石安山岩の切石を使用した横穴式石室や、いわゆる模様積み石室が多用される。坊主山古墳は角閃石安山岩の横穴式石室内に鉄剣、耳環、人骨などが出土しており、最近まで円筒埴輪が散布していた。また、昭和62年度に堂場地区で本庄市教育委員会が発掘調査を実施した際には新たに9基の古墳址を確認しており、本調査の古墳址と同様に終末期古墳で構成されていることが判明している（本庄市 1988）。これらの点から万年寺支群で出現した古墳は、墓域の拡大とともに東方の小島・蛭子塚支群へと派生していったものと考察される。しかし、より東方に分布する「近八幡支群」との関係など、なお不明な点は多い。

さて、本調査の対象地域である「三田支群」については、これまで本庄128号遺跡と上里町7号遺跡が盛土を残す古墳として周知であるにすぎなかった。しかし、昭和57年度における範囲確認緊急調査で下野堂二子塚古墳の範囲、規模をはじめ、各古墳址の分布状態などが把握されつつある。第27図は昭和42年調整本庄市白図であるが、本庄市及び上里町にかけて古墳址と思われる等高線が多く観察される。これらのほとんどは地籍図に反映されていないが、航空写真上には明瞭に認められる（写真2）。今回の発掘調査例を含め15基前後を数えるが、地目や畦畔などから未だ埋蔵されている古墳址も存在するものと考えられ、最終的には20数基を越す可能性がある。したがって、旭・小島古墳群といった広義の目からみれば、やはり三田支群として一つの支群を形成していることが判明する。



写真2 三田支群航空写真



第27図 三田支群における古墳及び古墳址と推定される分布図

番 号	所 在 地	墳 形	規 模	備 考
第1号墳	本庄市大字下野堂 字開拓610-1.5,653-3	前 方 後円墳	全 長 約 60m	現本庄・上里学校給食センター 昭和22年の航空写真に明瞭 昭和10年田旭村地籍図に字二子塚 518として墳丘部が観察される。
第2号墳	〃 大字下野堂 字開拓611,653-1	円 墳	径約35m	全面が畑地でわずかに盛土が残存 若干の土器が散布。
第3号墳	〃 大字下野堂 字開拓607	円墳?		昭和42年調整本庄市白図に円形の 等高線が観察される。古墳?。
第4号墳	見玉郡上里町大字 七本木字三田開拓	円 墳	径約25m	円弧を描く等高線が観察され、航 空写真に明瞭。
第5号墳	〃	円 墳	径約22m	等高線が2重に回る。航空写真に 明瞭。上里町遺跡調査会発掘調査。
第6号墳 (山本5号)	〃	円 墳	径約42m	上里町7号遺跡にあたり、本調査 地区内第5号墳にあたる。
第7号墳	〃	円 墳	径約20m	等高線が回る。航空写真に痕跡が 観察される。横穴式石室が存在し たと伝える。
第8号墳	本庄市大字下野堂 字七本木境169-1	円 墳	径約22m	等高線が回り、航空写真に残丘が 観察される。
第9号墳	見玉郡上里町大字 七本木字三田開拓	円 墳	径約18m	等高線が回り、航空写真に観察さ れる。
第10号墳	〃	円 墳	径約25m	等高線が回り、航空写真に明瞭。
第11号墳 (山本1号)	本庄市大字下野堂 字屋敷内113-8	円 墳	径約12m	本調査地区第1号墳にあたる。
第12号墳 (山本2号)	〃 大字下野堂 字七本木境195-1	円 墳	径約22m	本調査地区第2号墳にあたる。
第13号墳 (山本3号)	〃 大字下野堂 字七本木境194-1	円 墳	径約12m	本調査地区第3号墳にあたる。
第14号墳 (山本4号)	〃 大字下野堂 字七本木境194-1	円 墳	径約12m	本調査地区第4号墳にあたる。
第15号墳	〃 大字下野堂 字開拓610-3,小島二夕 子塚2140	円墳?		範囲確認試掘調査により堀を確認 古墳址?

第1表 旭・小島古墳群三田支群一覧表

本支群の消長で特徴的なことは、前方後円墳の下野堂二子塚古墳が所在することである。戦後早い時期に破壊消滅したため不明な点が多い。昭和56年度の範囲確認試掘調査並びに、周辺の聞き込み調査によると、ほぼ南面し周堀を持ち、全長は約60m前後を測る。内外の各種施設や遺物等はまったく判明していない。したがって、本墳の年代推定は復原された墳丘企画よりもとめるはかないが、少なくとも6世紀前半まで遡る可能性を秘めている。本支群で他に時期が判明しているものは、今回調査を実施した5基のみで散布する土器片や、散乱する角閃石安山岩などから横穴式石室を保有する終末期古墳で構成されていることが推察される。現状においては推定される下野堂二子塚古墳とこれらの古墳の時間的間隔は大きい。下野堂二子塚古墳を6世紀代に位置づけると、古式古墳が群として形成されている八幡山・三空山古墳周辺の状況と異なり、両者の距離は600mを測る。これらの点から本前方後円墳は当初比較的広範囲な兆域を有した単独墳であったことが暗示されている。本支群の変遷は下野堂二子塚古墳→三田支群第6号墳→同12・14・13・11号墳へと推移する。下野堂二子塚古墳と三田支群第6号墳は約100年の時間的空白がある。この間に古墳が造営されていないものと仮定すると、両被葬者は疑制的同族集団が後に営んだことも考慮される。

いずれにせよ今後各古墳の時期を解明していかなければなるまい。

補 注

- (1) 三空山古墳の西西北にあたる本庄5号遺跡の範囲内において、3基の古墳址を確認しており、周堀内より鬼高Ⅰ式古段階の坏を検出している。この点から現在の万年寺集落下に古式古墳群が分布するものと推定される。
- (2) 本庄市史編集委員の水島治平氏の御教示によると、五領式の土器片が採集されている。
- (3) 石神境古墳の発掘調査では周堀と墳丘にかかる部分で国分式期と推定される住居址が検出されており、集落の移動は古墳群の形成期間中のみであった可能性もある。

引用文献

- 大渡 八郎 1956 「本庄市及び児玉郡の古墳について」『古墳調査報告書』第1編 埼玉県教育委員会
- 児玉町 1980 「長沖古墳群」 児玉町教育委員会
- 佐藤 好司 1986 「小島土地区画整理事業に係る試掘調査概要」
- 佐藤 好司 1988 「本庄市内出土の埴輪」『本庄市立歴史民俗資料館紀要』第2号
- 塩野 博 1980 「埼玉の古墳」『埼玉の文化財』第20号 埼玉県文化財保護協会
- 菅谷 浩之 1969 「本庄市塚合古墳調査報告書」 本庄市教育委員会
- 並木 隆 1976 「本庄市旭古墳群の調査」『第9回遺跡発掘調査会発表要旨』 埼玉県考古学会、埼玉県遺跡調査会、埼玉県教育委員会
- 本庄市 1976 「本庄市史」 資料編
- 本庄市 1978 「御手長山古墳発掘調査報告書」 本庄市埋蔵文化調査報告書 第1集 本庄市教育委員会

- 本 庄 市 1979 『女堀遺跡群発掘調査概報』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第2集 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1981 『本庄住宅団地造成基本計画策定地域内埋蔵文化財分布状況報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第3集 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1982 『旭・小島古墳群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第4集 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1983 『二本松遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第5集 第1分冊 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1984 『本庄遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第6集 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1985 『夏目遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第5集 第2分冊 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1985 『本庄遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第7集 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1986 『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第8集 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1987 『社具路遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第5集 第3分冊 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1987 『南大通線内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第9集 第1分冊 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1987 『東富田遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第10集 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1987 『本庄住宅団地内遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第11集 本庄市教育委員会
- 本 庄 市 1988 『旭・小島古墳群発掘調査報告書Ⅰ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第12集 本庄市教育委員会
- 水島 治平 1985 「久上堀・女堀・九郷用水堀—古代、中世の質美・児玉をめぐる—」 『本庄市史拾遺』 第20号 本庄市史編集室、本庄市教育委員会
- 増田 一裕 1984 「埼玉県北西部の旧石器」 『旧石器考古学』 28 旧石器文化談話会

あ と が き

本庄市大字下野堂に株式会社山本製作所の本庄工場建設の協議書が届いたのは、昭和59年であった。発掘の迅速化を目標に、現地の調査は3か月前後で完了したが、その後、大規模な調査、整理作業がおしよせ、報告書の刊行は昭和64年仲春を目標に発行する運びとなった。しかし、一部入稿後の昭和64年1月7日をもって昭和はおわり、平成の時代がおとずれた。この間、旧国鉄はJRとなり社会情勢も刻々と変化し、5年の歳月に歴史そのものを、本調査にたずさわったものは感じたものと思う。

株式会社山本製作所内に所在した5基の古墳址は、いずれも7世紀代に所属する。この世紀は、中央の大和では古来の古墳文化から脱却し、仏教文化が必要され、飛鳥・白鳳文化がおとづれた時代で、西暦645年にはじめて『大化』の年号が用いられた。今をさる1344年前の出来事である。

本発掘調査で確認された古墳址の被葬者も未来永劫を望み、そのモニュメントとして古墳を造営したものと思いをはせる。今日本庄市の文化遺産となったが、ちなみに『文化遺産』を広辞苑で紐解くと「将来の文化的発展のために継承されるべき過去の文化」とある。本庄市教育委員会の文化財保護行政もまた、明日の本庄への指標として鋭意これらの保存事業を行っている次第であるが、このことについて御理解と御協力をいただいた株式会社山本製作所並びに、調査に御協力いただいた各位に対し、文末ではあるが記して感謝する次第である。

平成元年1月11日

増田 一裕 記

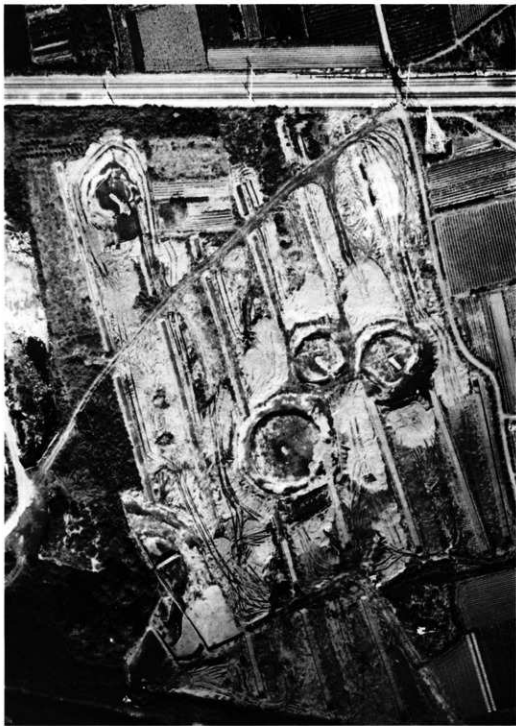
写真図版



1 昭和22年アメリカ軍航空写真(1、二子塚古墳。2、上里7号遺跡)



2 昭和55年航空写真(本庄市教育委員会)



1 事業予定地内古墳跡航空写真(昭和59年10月15日撮影)



1 調査前景観（西より望む、8月1日撮影）



2 調査後景観（同地より望む、11月1日撮影）



1 第1号墳全景



2 第1号墳横穴式石室壁面外部状態



1 第1号墳横穴式石室全景



2 第1号墳横穴式石室(正面)



1 第1号墳横穴式石室各部状態



第1号墳横穴式石室壁面外部状態



2 第1号墳横穴式石室右側壁外部坏出土状態(左)。第1号墳周濠陸橋部須恵器出土状態(右)。



1 第2号墳墳丘全景



2 第2号墳墳丘北側断面



1 第2号墳内部構造痕跡（矢印は下写真出土場所）



2 第2号墳周堀内須恵器出土状態



1 第3号墳墳丘全景



2 第3号墳周堀各断面



1 第3号墳横穴式石室全景



2 第3号墳横穴式石室根石及び、石抜き痕状態



1 第3号墳横穴式石室奥壁根石状態



2 第3号墳土器出土状態（石室前面）



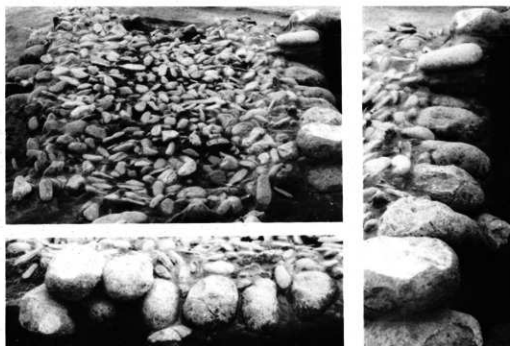
1 第4号墳墳丘全景



2 第4号墳固堀北断面



1 第4号墳横穴式石室全景(左)及び、石抜き痕(右)



2 第4号墳横穴式石室玄室部細部状態(上、礎床部。下及び、右、側壁根石状態)



1 第5号墳近景（昭和56年筆者撮影）



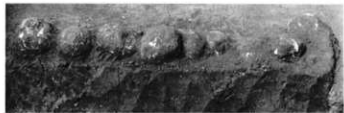
2 第5号墳近景（南より石室掘り方方向を望む）



1 第5号墳発掘区全景（東南より望む）



2 石室掘り方前面須恵器出土状態



3 内部構造遺存状態（上、掘り方。下、列石）



1 第5号墳周堀（半月状大土壇、発掘前）



2 第5号墳周堀（半月状大土壇、発掘後。後は外堀）

旭・小島古墳群発掘調査報告書 II

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 本庄市教育委員会
本庄市銀座1-1-1
印刷 金井印刷工業株式会社
本庄市銀座1-9-8

